

コエ語における時制体系

大野 仁 美

1. はじめに¹

コエ語族（コイサン諸語）の時制（およびアスペクト）体系は、語族内で大きな変異をしめす一方で、系統関係のない近隣の言語のそれと共通の特徴を有する。本稿では、コエ語族に属す言語のうち、文法記述およびテキスト資料が豊富である4つの言語を対象に時制体系を比較する。(1) 時制とアスペクトが融合しているか、それとも分析的か、(2) 生起位置は固定されているか、(3) いくつの区分を有しているか、(4) 時制・アスペクト辞の出現は必須か、という4項目をたて、比較の結果明らかになる共通点および相違点が、系統分類上の距離の遠近からは説明できないことを指摘する。なおテキスト内での使用など具体例を用いながらの検討は次稿にゆずる。

コエ (Khoe) 語族は、コイサン諸語としてひとまとめにされる語族の1つである²。そこに属する言語は、「カラハリコエ (Kalahari Khoe)」と「コエコエ (Khoekhoe)」に下位分類され、本稿ではそのうちコエコエの北グループに属するナマ (Nama) 語と、カラハリコエの西グループに属す3つの下位グループから

それぞれ1言語ずつ、クエ (Khwe) 語、ナロ (Naro) 語、グイ (G!ui) 語³をあつかう。これらの系統的関係を図1に示す（本稿で扱う言語には下線をひいてある）。このうち、早くから時制・アスペクト体系が概観されていたのは Hagman (1977) によるナマ語と、Köhler (1981, 1989) によるクエ語である。前者は時制とアスペクトがそれぞれ別のマーカーで示される分析的な体系を、後者は両者が区別されていない融合した体系を有している。次節ではまずこの2つの体系をみたあと、続けてナロとグイの体系を見ることにする。

2. クエ語の融合時制・アスペクト体系

クエ (Khwe) 語は、カラハリコエの西グループに分類される。ここでの記述は、主に Kilian-Hatz (2005) に基づく。

クエ語の時制とアスペクトは融合しており、時制辞とアスペクト辞の区別はない（これら両者を合わせて TA 辞とよぶことにする）。述語動詞と共に通常1つの TA 辞の生起が必須で、TA 辞は2つ以上同時に生起しない。TA 辞の生起位置は動詞の後⁴に固定されている (Kilian-

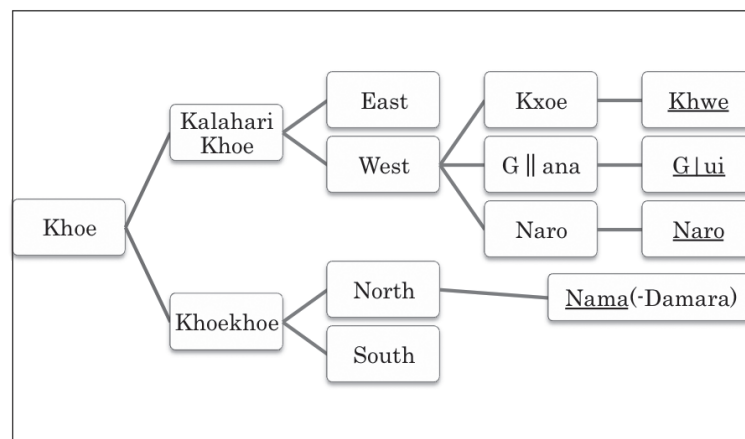


図1 本稿で扱う4言語の系統関係
(Güldemann & Vossen 2000 を元に作成)

¹ 本稿を執筆するにあたり、査読委員から詳細なコメントを頂いた。記して感謝申し上げる。本稿は、科学研究費補助金（基盤B 課題番号70245273 研究代表者大野仁美）を受けて実施した研究の成果の一部である。

² 従来は「中部コイサン語族」と呼ばれていた。現在は Kwadi 語とあわせて Khoe-Kwadi 語族とされる (Güldemann 2004)。Kwadi 語の時制・アスペクト体系はほぼ未記述であるため、本稿では Kwadi については扱わない。

³ 本稿で扱うグイ語資料は、特に明記しない限り、著者が現地調査で収集したものである。

⁴ いわゆる juncture 要素をはさんで TA 辞が後続する。

表1 クエ語のTA辞 (Kilian-Hatz 2005 をもとに作成)

時制区分	名称	内容	語形	起源
過去	Past 5 far remote past	Past 4 よりさらに過去 (folklore など で用いられる)	- <i>hĩ</i>	< <i>hĩĩ</i> ('do', 'make')
	Past 4 remote past	数日~数週間前	- <i>tĩ</i>	< <i>tĩĩ</i> ('stand', 'stay')
	Past 3 yesterday past	昨日~一昨日	-// <i>òm</i>	'sit down/sleep on a tree (of birds)'
	Past 2 near past	今日	- <i>tà</i>	< <i>tàn</i> ('stand up')
	Past 1 perfect	'just', resultative	- <i>hā:</i>	< <i>hāā</i> ('be there', 'go on', 'continue', 'abide')
現在	progressive	'立った姿勢で'	- <i>tè</i> ~ - <i>è</i>	< <i>tɛ</i> ('stand', 'stay')
		'座った姿勢で'	- <i>n#ùè</i> ~ - <i>n</i>	< <i>n#ú</i> ('sit down') <i>n#òe</i> ('sit')~ <i>n#úi</i> ~ <i>n#ũ</i>
	habitual	'横になった姿勢で'	-// <i>òè</i> , ~ -// <i>ò</i>	'lay oneself down', 'lie', 'sleep'
未来		Future certainty Future possibility	- <i>gòè</i> ~ - <i>gò</i>	< <i>koé</i> ('go towards')?

Hatz 2005)。TA 辞がないケースは特殊な読みがなされ、(a) 命令法⁵か、(b) 無時制文となる。ここで「無時制」とは、thetic や習慣・性質を表す場合ということである (Kilian-Hatz 2005: 121-126)⁶。

クエ語の TA 辞はいずれも動詞起源と考えられており、そのいくつかは現在でも動詞と同形である。表1にクエ語の TA 辞一覧をしめす。ソースと考えられている動詞 (主に Köhler (1989) に基づいている) を右端の行にあげる。

クエ語の TA 辞の体系としての特徴は、過去に5項目 (ただし1つは perfect)、現在に3項目、未来に1項目と、分布が偏っていることである。意味的にも偏りがあり、Kilian-Hatz も述べているように、過去の TA 辞は、perfect を表すことがある Past 1⁷ をのぞいて deictic であるが、現在を表現する TA 辞はすべてアスペクト性が強く、それぞれ「立つ」・「座る」・「横になる」という姿勢動詞からできている⁸。このうち「立つ」を起源とすると考えられる -*tè* が、もっとも一般的な「現在」として用いられる⁹。同様に未来を表す TA 辞は、「可能

性」を表すこともあるなどムード性が強い。これらの TA 辞は複数を組み合わせることができないので、たとえば「過去に進行中・継続中であった動作」などを表現するためには他の方法をとらなければならない。クエではその役割は converb construction¹⁰ が担っているようである (Kilian-Hatz 1998, 2005)。

3. ナマ語

次に、クエコエに属するナマ語の時制・アスペクトの表示について、それが先に見たクエ語のそれとどのよう異なるかを見てゆく。ナマ語は、時制とアスペクトは融合しておらずそれぞれ別のマーカーで示される。これらは共起可能で、その組み合わせによって時が表現される。

表2はナマ語の時制・アスペクト辞を示す。アスペクト上の区別のある動作動詞の体系をみる。

ここで用いられているタームの説明をしておく。Hagman (1977) によると、ナマ語のアスペクトは

⁵ 2人称が主語の場合だけでなく、1人称が主語 (hortative) および3人称が主語 (jussive) の場合も含む。

⁶ グイ語では、「習慣や性質」は詳細に区別されたアスペクト辞をもちいて表現され (Nakagawa 2014)、命令法は、irrealis でもちいられる主語の形で表される (Ono 2006)。

⁷ Past 1 (=perfect) に該当する要素は、後で見る3言語においても唯一クエ語のそれと同じ位置、すなわち動詞の後に生起する要素である。

⁸ 姿勢動詞が TA 辞のソースとなることは既に指摘されている (Bybee et al. 1994)。グイ語でも姿勢動詞が様々なアスペクト辞へと発展している (Nakagawa 2014) が、本稿では扱わない。

⁹ クエ語のテキスト (Kilian-Hatz 1998) を見ても出現頻度が高い。

¹⁰ Converb は -*ko* によって示されるが、-*ko* は従来さまざまに解釈されてきたことは興味深い。Köhler (1981) は6つめの過去 TA 辞としていたが、Kilian-Hatz (2005) があげた事実「クエ語は -*ko* を有する動詞だけでは文を構成できず、TA 辞を有する述語動詞の存在が必須である」が決定的であると考え、本稿でも -*ko* を単独の TA 辞とは見なさない立場をとる。

¹¹ Witzlack-Marekovich (2006) も Hagman (1977) に従って、'punctual/imperfective/perfective' という用語を用いている。

表 2 ナマ語の時制・アスペクト辞
(Hagman 1977, Witzlack-Makerevich 2006¹² Haacke 2013a および 2013b に基づく)

時制	Remote past	Recent past	Present	Future
アスペクト	<i>ge</i>	<i>go</i>	\emptyset	<i>nî</i>
Active				
Punctual/Perfective	<i>ge (a)</i>	<i>go (a)</i>	-	<i>nî</i>
Imperfective	<i>ge re</i>	<i>go ro</i>	<i>ra/ta</i> ¹³	<i>nîra</i>
Perfect	<i>ge hâ i</i>	<i>go hâ i</i>	<i>hâ</i>	<i>nî hâ i</i>
Stative	<i>ge i</i>	<i>go i</i>	<i>(a)</i>	<i>nî i</i>

表 3 Hagman(1977)によるナマ語のアスペクトの
三項対立

	動作は complete しているか?	Complete した時点はいつか?
punctual	complete	発話時点
imperfective	incomplete	—
perfective	complete	発話時点以前

punctual/imperfective/perfective の三項対立である¹¹。この3つの対立は表3のようにまとめられる。

この定義によると、Hagman による 'punctual' は、「動作が終了している」という点で、「動作が終了していない」'imperfective' と対立しており、「発話の時点と同時に動作が終了」するという点で、「発話時点以前に動作が終了している」'perfective' と対立する概念である。とすると、Hagman のいう 'perfective' は、その定義からして 'perfect' と呼ぶほうが現在では一般的であろう¹⁴。この要素に対する Hagman (1977: 66) の定義を以下に示す：

Perfective aspect may occur with all tenses. A sentence whose verb phrase has this aspect describes an event as having been completed before the time depicted by the tense morpheme, and resulting in a "state of affairs" obtaining at the time depicted by the tense morpheme.

実際、この要素に対して、Haacke は Haacke (2013a: 144) では 'perfect' を、Haacke (2013b: 336-338) では 'perfective' を用いている。

一方、Hagman が呼ぶ 'punctual' は、より一般的に 'perfective' と呼べるものである。

次に、'Imperfective' は、Hagman によると *incomplete* で *habitual* や *progressive* を表す。Haacke (2013a: 144) は *progressive/inchoative* とも呼んでいるが、これらを総合した名称として、*imperfective* はそのまま妥当であろう。これらの理由から、表2では *punctual* あるいは *perfective/imperfective/perfect* という名称を採用した¹⁵。

ナマ語には過去に2区分存在する。2つの過去時制に関して Hagman (1977) は、「recent' は、発話時点より早い今日～昨日起こった出来事に、'remote' はさらにそれ以前、と区別される、しかしそれは相対的なものであって、話者がどうとらえるかによる」、としている。「過ぎた年 (= 昨年)」にも、それが数ヶ月前のことであっても *recent past* を用いることができる。

次に、Hagman (1977) が記述している TA 辞の基本的な出現位置は以下のように示すことができる。

(tense) + (imperfective) + V [+act] + (perfect)¹⁶

動作動詞 [+act] の場合、いずれかの TA 辞は必須で、*imperfective* は動詞の前、*perfect* は動詞に後続する (この2つの要素は共起しない)。*perfective* はアスペクト辞がないことで、同様に時制では現在時制が時制辞がないことで示されるが、両者が重なった「現在時制の *perfective*」は存在しない。現在時制であらわされる動作の実現の時点が現在より前の時点すなわち過去を示すことになってしまうという意味的な制限のためである。したがって、ナマ語には時制辞もアスペクト辞もない文は許されず、時制が現在 (= 無標) の場合は、*imperfective* か *perfective* かどちらかのアスペクト辞が出現する。

このように、ナマ語の時制辞は、過去2つ・(現在は \emptyset)・未来1つとクエ語にくらべてコンパクトな体系で

¹² ただし Witzlack-Makerevich (2006) は、標準ナマではなく、Richtersveld の ナマを扱ったものである。

¹³ *ra* と *ta* は音韻的に条件づけられた異形態である：先行する形態素の末尾が母音なら *ra*、末尾が子音なら *ta* が用いられる (Hagman 1977: 66)。

¹⁴ 両者の混同をさけるために、バントゥー語研究において *perfect* を指して *anterior* を用いることがあるが、ここでは採用しない。

¹⁵ Hagman があげているマーカーのうち、*ka* 'indefinite tense marker' を他の2人はあげていないことにここで触れておく。この *ka* は「彼が行くなら、私も行く」のような、動作が行われる時間が特定されていない場合に用いるものである。同様の役割を持つ可能性のある形式が次節で扱うナロで見られるが、いずれも本稿では TA 辞としては扱わない。

¹⁶ ただし動詞は focus のスロットである文頭に前置されることがある (TA 辞は focus スロットには入らない)。TA 辞の生起位置はさらに自由な変種もある (cf. Witzlack-Makerevich 2006)。

ある。ただし時制辞とは独立したアスペクト辞が存在し、動作動詞の場合アスペクト辞の有無による意味上の対立は3つである。時制辞とアスペクト辞は組み合わせることができるので、両者無標示の場合を除きお互いに対立する11個の時の表現が可能である。ここから、TAが融合している体系に比べて、分析的な体系では、時制の remoteness の区分は比較的少なくなるといふ相関の可能性を考えることができる。

ナマ語におけるTA辞の出現位置は、動詞に後続する位置に固定されていたクエ語のそれとは大きく異なるが、語族をこえて接触言語と類似していることがGüldemann (2006)によって既に指摘されている。Güldemann (2006)は、以下のようなモデルを提示し、この構造が(南コエコエに分類される死語であるオラ(!Ora)語と共に)それらが接触している言語であるトゥー(Tuu)語族(従来南コイサン族と呼ばれていた語族)のハム(|Xam)語や東コン(East !Xoõ)のそれと平行であることを指摘している：

- perfective : "tense ϕ verb phrase" で示される
- imperfective : "tense aspect verb phrase" で示される
- relevance/stative : "tense verb phrase *haa*" で示される

つまり：perfectiveは時制辞有・アスペクト辞無で、imperfectiveは時制辞有・アスペクト辞有で表される。時制辞とアスペクト辞の出現位置は動詞の前で、これらの生起順序は時制—アスペクト(T-A)。

また、relevance/stativeはperfectを指すが、その位置は動詞の後。

ナマ語に見られるこれらの特徴は、コエコエがトゥー語族と(系統的な関係を越えて)共有して持っている「非コエ的な」、あるいは「非カラハリコエ」的な特徴なのだろうか。実際には、クエ語と同様にカラハリコエに属するナロ語とグイ語も同様の特徴を持っている。次にこの2つの言語をみていこう。

表4 ナロ語の時制辞 (Visser 2013a, 2013b による)

時制区分	名称	説明	語形
過去	distant past	先週よりさらに前	//x'a
	intermediate past	昨日～先週	thu
	immediate past	今日～昨日	/na
現在	present		\emptyset
未来	future		ga

4. ナロ語の時制体系

ナロ語はクエ語と同様にカラハリコエの西グループに属し、その下位グループNaroとしてまとめられる言語の1つである(下位グループ名にもこの言語の名前が採用されている)。次節に見るグイとは話されている地域が接触している。まずナロ語の時制を表4で示す。

ナロ語の時制辞は、過去3・(現在は ϕ)・未来¹⁷の体系である。これに加え、「一般的な過去」の意味を持ち、条件節で用いられることが多いという *kò* というマーカーが存在する。このマーカーは、すべての時制辞と共起できるので、純粋に過去時制をあらわすものとは考えにくい。「条件節」で用いられることが多いということから、先に見たナマ語の indefinite tense marker とされる *ka* と近い機能をもつものなのではないかと考えられる。いずれにせよ、これらのマーカーは時制辞ではないと考え、考察の対象とはしない。

ナロ語では、これら5つの時制表示と4つのアスペクト辞¹⁸が共起する。ただし無標は不可で、現在時制を表す文は continuative のアスペクト辞をとまなう。これらの出現する位置は、おおむね、アスペクト辞は動詞の後ろ、時制辞は過去マーカーが動詞の前、未来マーカーは動詞の後(現在時制はマーカー無し)である。このように、TA辞の生起位置は、「動詞の後のみ」に固定されているクエ語より自由で、系統的には離れているナマ語に近い。しかし地理的には、ナマとナロは現時点では接しているとは言えず、間に系統関係のないトゥー語族やカー(Kx'a)語族(従来北部コイサンとよばれていた語族をふくむ)をはさんでいる。ナロのTA体系が、系統的にはより近いクエとではなく、遠いナマと共通点を多く持つのだとしたら、それを引き起こしたの

¹⁷ ナロ語では未来時制辞は1つしかないが、動詞 *sii* 'to go' と *haa* 'to come' は両者ともにある動作が発話時点以降になされることを表すという(Visser 2013a: 197)。これらは助動詞として解釈されている。

¹⁸ アスペクト辞は以下の5つがあげられているが、最後の 'counter-expectation' は時制辞と共起しない。それ以外の4つはおおむねどの時制辞とも共起する。これらの意味解釈に関しては、Visser (2013a) も対立が明瞭でないと述べているものもあり、再考が必要だと考える。

- ē* neutral
- ko* continuative (in the present)
- a* perfective
- a hāa* imperfective
- a-* counter-expectation

は、ナマとの接触であるとも、他語族との接触であるとも考えられる。

5. ギイの時制体系

最後にギイの体系を見る。ギイ語は、クエ語やナロ語と同様、カラハリコエの西グループに属す。その中の下位グループであるガナグループに属すが、同じグループメンバーであるガナ語以外にもっとも地理的に近い言語はナロ語である。

ギイの時制は、表 5 に示すように、過去 3・(現在は ϕ)・未来 3 の symmetric な体系である¹⁹。7 区分というのは 4 言語中最大の数である。特に、他の 3 言語が未来に 1 項目しかもっていないのに対して 3 項目存在する点が異質である。アスペクト辞も 8 つ存在し (Nakagawa 2014)、これらは時制辞と組み合わせ可能で、TA 辞がない文もひんぱんに用いられる。ギイ語の例は、分析的で組み合わせ可能な時制辞・アスペクト辞をもっているが体系はコンパクトになっておらず、さらに elaborate されている例である。

表 5 ギイ語の時制辞

区分		説明	語形	備考
過去	remote	数日前よりさらに過去	<i>qx'ó</i>	
	yesterday	昨日～数日前	<i>c'ú</i>	ナロの <i>thu</i> と同起源、「昨日」
	today	今日	<i>ki</i>	
現在	ϕ			
未来	today	今日	<i>hñ</i>	< 'do'
	tomorrow	明日～数日先	<i>ʔúsi</i>	「明日」
	remote	数日先よりさらに先	<i>qx'áwā</i>	

これらは、perfect のみ動詞の後ろに固定で、それ以外の時制辞およびアスペクト辞は、基本の生起位置が主語の後、動詞の前である。生起制限は、①時制が常にアスペクトより前にあること、と、②主語 (およびムード辞) より前 (=左) にでないこと、という 2 つがあるだけで、それ以外は自由である。このように、ギイ語は、コエコエとトゥー語族との間に見られた構造の平行性を共有している。

カラハリコエに属するギイ語が、もともとこれらの要素をもたずに、他からの影響でこの体系を展開してきたのだとしたら、ナマとは地理的に離れているため少なくとも直近では考えにくい。一方、トゥー語族は、ナマとナロ・ギイの間にちょうど分布している。コエ語族のこれらの言語が「非カラハリコエ」的な時制・アスペクト

の体系を発展させてきたことにトゥー語族が影響を及ぼした可能性は高いと言えるだろう。

6. まとめと今後の展開：TA 辞はどのように用いられるのか

コエ語族に属する 4 つの言語の時制を比較した結果を表 6 に示す。よりクエに近い特徴をしめすものからそうでないものへと上下に並べると以下ようになる。過去の区分が多いことを除いて、ギイ語がもっともクエから離れた体系をもっている。

表 6 コエ 4 言語の時制体系の比較

	TA 辞の融合度	基本生起位置	区分	TA 辞の出現
クエ	融合	固定：動詞に後続	過去 4 未来 1	原則として必須
ナロ	分析的	過去時制辞は動詞の前、 未来時制辞は動詞の後	過去 3 未来 1	必須
ナマ	分析的	動詞に先行	過去 2 未来 1	必須
ギイ	分析的	動詞に先行	過去 3 未来 3	必須ではない

これらの言語において TA 辞は実際にはどのように用いられているのだろうか。民話などのナラティブデータを見る限りクエ語とギイ語は対照的で、クエ語がほとんど時制の屈折が必要な言語のように文毎に TA 辞を有するのに対し、ギイ語の時制辞の出現は最低限であり、TA 辞のない文も多くみられる (Ono 2014)。本稿は時制を表示する要素がどのような体系をもっているのかをコエ語内で概観したが、実際にこれらがどのようにアスペクト辞をはじめとした他の要素とくみ合わさって時の表現に用いられるのかは稿をあらためて考察したい。

参考文献

- Bybee, J., R. Parkins & W. Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Güldemann, T. (2004) Reconstruction through 'deconstruction': the marking of person, gender, and number in the Khoe family and Kwadi. *Diachronica* 21, 2: 251-306.

¹⁹ これに加えて、TA 辞である可能性のあるものが 2 項目ある。英語で 'just' を用いた文と似た概念を表す「ゆうべの出来事」を表現する際に用いられる形式と「ちょうど今したばかりの出来事」を表現する際に用いられる形式 (しかもこの 2 つはもともと同形式) である。これらについては本稿では扱わない。

- Güldemann, T. (2006) Structural isoglosses between Khoekhoe and Tuu: the Cape as a linguistic area. In: M. Yaron, A. McMahon & N. Vincent (eds.) *Linguistic Areas: Convergence in Historical and Typological perspective*. Hampshire: Palgrave Macmillan, Pp. 99-134.
- Güldemann, T. & R. Vossen (2000) Khoisan. In: B. Heine & D. Nurse (eds.) *African Languages*: Cambridge University Press. Pp. 99-122.
- Haacke, W.H.G. (2013a) Morphology: Namibian Khoekhoe (Nama/Damara). In: R. Vossen (ed.): 141-151.
- Haacke, W.H.G. (2013b) Syntax: Namibian Khoekhoe (Nama/Damara). In: R. Vossen (ed.): 325-340.
- Hagman, R.S. (1977) *Nama Hottentot Grammar*. Bloomington: Indiana University.
- Kilian-Hatz, C. (1998) *Folktales of the Kxoe in the West Caprivi*. Köln: Rüdiger Köppe.
- Kilian-Hatz, C. (2005) *A Grammar of Modern Khwe (Central Khoisan)*. Köln: Rüdiger Köppe.
- Köhler, O. (1981) *Les langues khoisan*. In: J. Perrot (ed.) *Les langues dans la monde ancien et moderne*. Paris: CNRS. Pp. 459-615.
- Köhler, O. (1989) *Die welt der Kxoé-Buschleute im südlichen Afrika: Eine Selbstdarstellung in ihrer eigenen Sprache*. Vol.I. *Die Kxoé-Buschleute und ihre ethnische Umgebung*. Berlin: Dietrich Reimer.
- Nakagawa, H. (2014) The aspect system and posture verbs in G|ui. Paper presented at the 5th international Symposium on Khoisan Languages and Linguistics. Haus Bergkranz in Riezlern (フランクフルト大学), Austria, 7 July.
- Ono, H. (2006) Irrealis modality in /Gui. Paper presented at the 2nd International Symposium on Khoisan Languages and Linguistics, Haus Bergkranz in Riezlern (フランクフルト大学), Austria, 10 Jan.
- Ono, H. (2014) Temporal expressions in G|ui. Paper presented at the 5th international Symposium on Khoisan Languages and Linguistics. Haus Bergkranz in Riezlern (フランクフルト大学), Austria, 7 July.
- Visser, H. (2013a) Morphology: Naro. In: R. Vossen (ed.): 179-206.
- Visser, H. (2013b) Syntax: Naro. In: R. Vossen (ed.): 379-394.
- Vossen, R. ed. (2013) *The Khoisan Languages*. Oxon & New York: Routledge.
- Witzlack-Makarevich, A. (2006) *Aspects of Information Structure in Richtersveld Nama*. Magisterarbeit zur Erlangung des akademischen Grades Magistra Artium an der Universität Leipzig.